
シルバーハート

デリーコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルバーハート

【Nコード】

N39900

【作者名】

デリーコ

【あらすじ】

今まで同棲恋愛しかした事がなかった主人公。遠距離恋愛なんてもつての外！でも・・・好きになった人は遠距離でしか付き合えない人。

つまらない理由

そんなに不満はないけどほんとに全部嫌になる事。今そんな気持ちのお手本みたいだ。

私は長年住みなれた大阪を離れて東京に住む。

一ヶ月程前そう決心した。

突然なんか弾けた。

そういえば最近私・・・一人称ちいですが・・・おかしかったかも。

寂しいのかな。ごまかす為か酒の量が多すぎてその量たるや長年の友達がビツクリするくらい。

酒豪の両親が心配するくらい。

何があったかって・・・多分大した事じゃない。

最近彼女・・・ジュンと別れた。私ちなみにレズビアンです。

ホントのね。両親や友達にお昔からカミングアウトしてる。レズプレイがしたいだけのなんちゃってクソビアンじゃなくて真性のね。

本気で女を愛せる真性レズビアン。

元カノは優しい・・・ほんとにやさしくて・・・私の友達にも優しくしてみんなに優しくして。

仕事忙しくてなかなか会えなくて不満が溜まって女の子にモテる人だったから不安になって、私から逃げてしまった。

女の子扱いされなくて新しい服や髪型・・・恥ずかしいけど思い切って着たセクシーランジェリーを笑われた時にもうダメだって思っ

た。

つまない理由だと思う。でも心をざわめく不安・・・背中がゾツとするくらい寂しいあの気持ち多分誰にもわかんないよ。

他で埋めれたらよかったのかもね。でも他なんていらなかった。

寂しさを埋める情事に後悔以外何があるの？一時の快樂だけで寂しさは埋められない事くらいわかる程度には大人だしね。

何回も喧嘩して女の子として見てほしいって号泣して・・・でもダメみたいだね。一回家族になっちゃうとしばらくしてまたお母さんみたいな扱いになっちゃう。

毎朝のお見送りお弁当作りに抱きしめて寝かせてあげる事・・・頑張ったつもりが私にとってブラックな結果になっちゃった。

「別れたくない」って泣いた元カノをひどい、ほんとに酷いフリ方をしちゃった。

浮気しちゃった、その人を好きになっちゃったってね。嘘ついちゃったの。

私を大好きな元カノと踏ん切りをつける為取り返しのつかない理由がほしかったから。

別れて一ヶ月くらいして、長年の友達が元カノを好きになった。

へちいからいらなくなっただから今更戻りたいなんて言わないでよ！お願いだから解放してあげてよってさ。

ヨリを戻す気はないけど二人を見たくないって身勝手かな。

それと仕事の同僚・・・男なんだけど友達で私の事もカミングアウト済みなんだけどね。

その嫁から浮気相手と勘違いされて嫌がらせのFAX・・・。ほんとにあるんだね。ツラツラツラって長いFAX。内容もドラマ

みたいな・・・もういちいち言わなくてもご想像にお任せします。
ピアノだって事を誰にも黙ってくれてた友達の不倫疑惑を晴らす為
に、ストーカー並みの片思いでしたって事にしました。

職場の空気も悪くなりある日上司に東京に転勤してみないかと言わ
れ・・・邪魔だったんだろうや

私東京に行く事にしました。！

ばいばい大阪！愛しい友達家族！

やな事が重なりすぎちゃった。ばいばい大阪。

私が東京に行く理由・・・以上。

好きな人を作る計画

過去の恋愛を忘れるには新しい恋しかない。

私は東京での恋人候補を作ってみた。

ビアンの世界ではそこら辺に出会いはなく、ましてや東京に知り合いないなんていない・・・と、なると出会いたいなら掲示板が手っ取り早い。

彼女友達募集

初めまして

今は関西に住んですが年内に東京に住みます。

私の事

色白の茶髪ロングでよく巻き髪します。オシャレ好きでポチャだけど身なりには気を使ってます。

性格は明るくて温厚で人見知りはありません。

あなた

オシャレに気を使う

20代で金銭面自立してて普通に会話ができる人

Hの時はSさんだったら合うと思います。私ドMちゃんだから笑

お気軽にメールください。待ってます。

無難な内容での投稿だったからたくさんさんのメールがきた。

「初めまして。よかつたらメールしましょう」

「こんにちわ。まだ募集してますか？」

「セフレとかでもいいですか？」

「東京案内しますよ。メールください」

「初めまして！関西弁が好きです。仲良くなりましょう」
等々・・・。

無難なメールに無難な内容を返す。

見知らぬ人間とのメールは続かないものだ。

お互いに恐らく興味がなさだろう人間とのつまらないメールのやりとり。

その中である一人とのメールが日課になった。

仕事人間のみいちゃん。稼ぎもいらしくて性格も親しみやすい。

電話で話した時に声がハスキーでかっこよくてドキドキした。

けっこうなSらしくHも好きらしく、でも話し方は優しく何から何までその他大勢の中でもダントツにツボだった。

ちなみに私は性欲人間だ。Hがないと満たされずそれが別れの原因になったりする。愛されたい。

私だけを見つめる求めるあの行為が大好きだ。

私の全身を相手に感じてほしい。

私の全てを好きにしてほしい。

征服されて苦しくて泣いて頭が真っ白になって意識が遠くなる中で抱きしめられたい。

酷くされればされる程相手の所有物になった気がして満たされる。だから私は変態がかったけっこうなMだ。相手の条件にHが好きでSというのは絶対に必要だ。

初めてのメールから一ヶ月もたたない内に私は会ったこともない女性に恋をしていた。

馬鹿げてるけど・・・まだ会った事もないけど・・・東京での生活が心から楽しみになった。

電話で話す時間が増えていく。みいちゃんは優しくて頼りがいがありそうで私をバカだなーみたいな感じで話すけどそれがなんだか嬉しかった。

東京の生活に好きな人がプラスされた。

先日いつもの飲み仲間と呑んでるところに元カノカップルがきた。まだ付き合っていないらしいけど時間の問題なんだろう的な雰囲気。で二人は登場した。

私とモトカノが別れた事はみんな知ってる。もともとこのメンバーは私と元カノの友達の集まりで結成された。なので当然元カノも普通に集まりに呼ばれる。

みんな大人だ。私達の事にはあえて触れない。

私も普通に二人を交互に見て笑顔で挨拶をする。

自分から捨てたくせに二人をなるべくなら見たくはない。でもこんな気持ちになるのもあとわずかな期間だ。

あえて明るく振舞う。女ばかりでラグジュアリーバーのソファ席を占領して盛り上がる。

酒が進み饒舌な友達が挙手した。ハイ！とみんなでその子を指さす。

発表・・・と続けた。

「ちに東京で彼女らしき人ができたとの事です！」

「まじで！！！！！！？」全員が感極まった声をあげ他の席の客からも注目を浴びるがお構いなした。

みんな信じられないと目を大きくして騒いでいる。

私は恋愛は絶対慎重派だ。付き合うのに半年ほどかかる。寂しがりやのくせに遊びのHは好きじゃない。

狭い世界だ。自分に価値は持っておきたい。今どき・・・と友達に笑われる程お堅い恋愛感だ。

そんな私だからか友達は大騒ぎだ。次々に質問が投げかけられる。

「どんな人！」「仕事は？」「かつこいい？」

私はビールグラスをグツと空けて首を横に振った。

「全然付き合うとかじゃないで。会った事もないしイイナとは思っけど相手はどう思ってるんか知らんしな。とりあえず東京に知り合いが欲しかった・・・メールしてたまに電話するぐらいかな。」

なーんや・・・と引き際もさすが潔い友人達だ。

「もし付き合ったらむこうから報告するわ」と話題を切り替えた。ほどなくして二次会は行き付けのバーだ、と全員その店を出た。

店のすぐ前にベンチがありそこでみいちゃんに電話してみた。

「おつかれー。」語尾を延ばす様な話し方も声もやっぱり好きだ。

店から聞こえるBGMが少し大きめで電話の向こうのみいちゃんにも聞こえるらしい。

クラブでよくかかる様な・・・私の好きな曲だ。

「後ろでいい曲かかってんねえ。あつ、これ。。じゃん。懐かしーな」

やっぱりこの人ツボ・・・いちいち素敵だ。

目の前の噴水や洒落た店の外装にネオンという場所が私の気持ちをさらに盛り上げた。

先に店に向かった友人達と合流したのは一時間後だった。

「遅いねーん！ラブコールか？」出来上がった友達がゲラゲラと絡んでくる。肩にまわされた手をそのままに「そうや」と失笑して見せて店員にビールを注文した。
しばらくしてトイレに立った。

トイレの個室から出ると突然元カノに手首を捕まれた。

そのまま引き寄せられて睨みつけられる。

「もう新しい女探しとんのか！ほんま頭おかしいんちゃうんか！」

普段怒る事のない元カノに初めて乱暴な言葉を浴びせられ困惑する。

「あんたも新しい彼女居るやん」

振り絞ってやっと出た声だった。

元カノは更に大きな声で言った。

「おまえを忘れる為や！でもまだ忘れられへんから付き合われへん言うてる！」

私の顔の横を拳が横切った。

ダンッ！とトイレのドアが振動で震えるのを背中で感じ心臓にも響いた。

硬直して動けない私の唇は元カノの唇で塞がれた。

「やだっ！」

すぐ手首を振りほどくと胸倉をつかまれもう一度口付けられた。

その時人がこちらに向かってくる気配を感じ私は解放されトイレから飛び出した。

バックをとり千円札をテーブルに置いて店を出た。

涙腺の弱い私はタクシーに乗り込み泣きながら自宅に向かった。
胸元の伸びたキャミソールはゴミ箱に捨てた。

翌日の夜私は元カノとその新しい彼女と居た。

昨日はゴメンという事。もう今日でちいとは会わないという事。二人が付き合うという事。

新しい彼女から「寂しかったら誰でもいいアンタなんか絶対に渡さない」と言われた事に多少傷つく。

でもいい。私の未来は東京にある。ばいばいだ。

二人が帰り入れ違いで友人が到着して談笑しているとみいちゃんからメールがきた。

「今話せる？」「もちろん！」「ハート付きのメールを返すとすぐに着信が鳴った。」

友人にちよいゴメンで顔をして店の外に出る。

「もしもし。おつかね。」

みいちゃんが低い声で続ける。

「あたしのメアド誰かに言った？」

私の思考がとまる。ん？

「なんで？言ってないよ」

「ちいの事で知らないアドからメールきた。どんな関係？ってさ。普通に友達って返したけど。」

なんで？言葉が出ない。

「あつ、今また入ってきた。えーと・・・ちいの携帯全部見たけどってさ。なにこれ？どういう事？」

私はさっきの記憶を辿った。あの時だ！！

あの二人と居る時に店の場所がわからないと言う友人を迎えに行った。近くだったから携帯は机に置いたままだった。

まさか・・・そんな事をされるなんて思ってもなく小さく呟いた。

「ゴメン。携帯置いて席離れた事があったからその隙に元カノカッブルが見たかもしれない。」

「まじかよー。またメールきた。ちいと連絡するなってさ。もう無視しとくかね。」

ごめんしか言えなくて・・・どうしよう・・・って涙が出てきた。
「泣くなよー。もうほっときやいいじゃん。」

だんだんとムカツイてきた。なんでそこまでされなあかんねん・・・。

「ちよつと元カノんち行ってくるわ。」

私の新しい幸せも許せないくらい私の事嫌いなんだ・・・。それならそれでいい。私も吹っ切れたよ。

「行かなくていいって。こういうのは無視だよ。もし会っても東京の子とは切れたんだって言ったらそれでおさまるでしょ。」
ほんとにみいちゃんて大人だな。益々好きになっちゃった。

「とりあえずまた連絡するね。ほんとにごめんね。」

30分後には元カノの家に居た。彼女は帰ったらしく、私は元カノと散々な口論になった。

携帯なんか見てない！と言うモトカノ。

確かに履歴もなかった。と、いう事はあの女か！

念のために携帯を逆に折って財布の中の有り金40000円を叩きつけて部屋を出た。

完全に終わったと強く実感した。

みいちゃんにめんどくさいとか思われてないかな・・・また私と関わる事で何か嫌な思いさせたらどうしようとか・・・考えたらなかなかどうメールしたらいいのかわかんなくておはようのメールの返信も出来なかった。

私は会った事もない人に完全に心を奪われていた。

オモイオンナ

芋焼酎に少し酔った友人マミがグラスを握ったままで人差し指を私に突き立てて言った。

「あんだ重い。」

それはみいちゃんに会つのを数日前にまでに控えたある晩の事だった。

私はみいちゃんの部屋に行く。当然泊まるんだろう。

当然Hな流れになるんだと思う。

好きじゃなくても恐らくみいちゃんはHできる。経験も数十人だと言っていた。

私はどうだろう……。初対面とはいえこの一ヶ月のメールでだいぶ惹かれてるのは事実だ。

当然抱かれてもみたい。今さら会って幻滅する気なんてない。

でもむこうの気持ちはまだ動いてなんか全然ない様な気がする。ただのメル友くらいだろう。

会って間もなくHする様な女を彼女にしたいなんて誰も思わないハズだ。

と、一連の悩みをマミに相談すると先ほどの発言に繋がる。

「大人なんやからもつと軽く考えーや。今時ヤル事そんなに重く考えてるんとか引かれるで。」

私は唇を尖らせて反論する。

「でもちいは好きやからHしたいけど付き合ってもないのに……」

「だーかーらーそれが重いっちゅうねん！付き合わないヤラせへんて。」

「……中学生か！いや……。小学生か！」

私が言い終わるより前にマミは会話をぶった切った。そして手を叩きながら笑い出す。

マミが連れてきた、私とは初対面のボーイッシュなタチさん二人もここぞと会話に交じってきた。

「ちいちゃんそれは重いわー。あんまり重すぎたらほんまに相手逃げるで。」

みいちゃんと同性側の意見にギクツとする。

「マミちゃんの言う事ももっともやで。ちょっとガード下げな。」
そうなのか・・・みんな口々に重いを連呼するもんだから自分がほんとに重い女なんだと改めて気づいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3990o/>

シルバーハート

2010年10月26日13時00分発行